



<235号>

2007年2月4日

「30周年の感謝と祈り」

—最初の日から今日まで、

そしてキリストイエスの日まで—

(ピリピ1：3～11)

武田 恒 義

パウロがピリピ教会の人々に宛てた手紙を読むと、私たちの心は躍ります。今日でもこのようなうれしい関係を保っている教会と牧師がいるなら、世界宣教拡大と神の国の完成のために大いに用いて頂けると確信するからです。

パウロが初めてヨーロッパ伝道に赴いたのはAD 50年のことです。伝道開始後、間もなく導かれたわずか2家族を中心にヨーロッパ最初のキリスト教会が誕生しました。それがピリピ教会です。

以来ピリピ教会は、福音に生きる喜びと感謝を具体的な形で表しました。その一つはパウロ一行のために、最初から祈り援助をしたことです。そして10年以上経った今も、ローマの獄中にあるパウロのところにまで贈り物を届けているのです。パウロもまた、ピリピ教会のために、いつも祈り励まし続けてきました。

パウロが「最初の日から、今日まで」と言う時、AD 50年から61年まで、共有してきた多くの恵みを思い出していることは間違いありません。しかし、それだけでなく、AD 35年に自らがキリストと出会ってからというもの人生の価値観が転換して、キリストに聞き従う生活の素晴らしさなどを思い返しているようです。また、母の胎内に宿ったその時から今日まで、守り導いて下さったのは主なる神であることを強く信じているのです。「胎内にいる時からになわれており、

生まれる前から運ばれた者よ。あなたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしがらぎになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なおわたしは運ぼう。わたしはせめて、救い出そう。」

(イザヤ 46：3～4)

パウロは自分の人生を、特にクリスチャンになってからの20数年間を振り返ってみた時に(第二コリント 11：23～30) 生きているのが不思議にさえ思えたことでしょう。また、常に変わらず行動を共にしてくれたピリピの教会の人々がいたからこそ、今日の自分があるのだと、パウロは心からの感謝を表しているのです。

しかし、パウロは自分もピリピ教会の人々も共に絶対に忘れてはならないことを記しています。「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでに、それを完成させて下さることを私は堅く信じているのです。」(6節) パウロは自分の志も努力も主が与え、主がなさしめて下さったこと、またピリピの教会を誕生させ、養い育て、福音宣教のために喜んで奉仕をし続けさせて下さったのも主であると確信しているのです。今まで、共に歩み、励まし、時には背負って運び救い出して下さった主が、世の終わりまで救いの御業を必ず完成して下さると言い切ることが出来たのです。これは「あしあと」という詩(15頁参照)にあるように、主に背負っていただいた経験は何度もしたから言える言葉ではないでしょうか。

私達も教会創立30周年を迎えるに当たって、大いなる感謝と喜びに満たされています。感謝と喜びの根源はキリストにおいて示して下さった神の愛です。私達のために自らの命を代価として払い、私達のために永遠の命を買い取って下さった主の愛において成長することが私達の祈りではないでしょうか。

(9節) キリストは教会(私達)を愛してご自身を捧げ今も変わらず愛し続けていて下さいます。ですから私達も主キリストに喜んで従って行くのです。